

旅は道連れ、世は情け

～女性ライフサイクル研究所、二十周年を迎える

⑦パワー、あるいは権力について

村本 邦子

パワー、あるいは権力は、自由を保証するものだろうか？それとも、自由を妨げるものだろうか？お金と責任についてはすでに書いたが、今回は、パワー、あるいは権力について書いてみたい。

パワーという言葉日本語に訳せば、「力」となる。それは物理的な力かもしれないし、もっと抽象的な力かもしれない。潜在的な力を表すこともあるだろう。そこに価値観は含まれないが、パワーを「権力」と訳す時、どちらかと言えば、否定的ニュアンスが浮上してくる。権力とは、一般に他人を強制し服従させる力だと考えられているからである。

女性ライフサイクル研究所を始めた頃、幼児期の虐待や性的虐待が中心的テーマだったことから、パワーはひとつの重要なキーワードだった。虐待とは構造的力関係を背景にした人権侵害であり、権力の濫用であり、パワーの使い方を間違えると大変なことになる。男が暴力をふるいやすいのは、相対的に女よりパワーを持ちやすいからで

あり、女もパワーを持たされれば、(たとえば子どもとの関係において) いとも容易く濫用してしまう。人は弱い存在であるのに、一人の人間に一人の命を預けてしまうような権力構造を作るから虐待が起こるのだ。

インターネットが未発達だった 90 年代初頭、唯一の情報源だったサンフランシスコから送られてくる「ヒーリング・ウーマン」というニューズレターには、「情報はパワーなり」というコーナーがあって、本や講演が紹介されていた。パワーという言葉が肯定的に使用されていることが新鮮だったし、情報や知識が力を支える一部であることに納得し、研究所の活動においても、情報発信を大きな柱のひとつにした。

女性運動のなかで使われてきた「エンパワメント」という概念がある。エンパワメントとは、パワーを与えること、持てるパワーを引き出すことであり、個人や集団が自らの生活への統御感を獲得し、社会的環境に影響を及ぼす力を獲得することを言う。これもパワーの肯定的な側面である。おそらく、パワーとは本来、中立的な言葉であ

り、その使用法によって、肯定的結果をもたらしたり、否定的結果をもたらしたりするのだろう。権力の方はどうだろう。

ずっと、権力から自由でありたいと思っていた。1994年に発行した研究所の年報4号では『表現と自由』の特集を編み、「表現と力」という原稿を書いている。今から二十歳ほども若かった自分の文章であるが、読み返してみれば、「なんだ、あの頃とあまり変わってないんだな」と思う。次のような内容だ。

誰かとの関係で非対称な「力」、一方的な「力」、責任を担いきれない「力」を持たされることは脅威である。「力」を持つと、その周りに虚構が多くなって、「本当のこと」が見えなくなったり、「大切なもの」を失ったりしやすい。「力」がその人から離れて存在するようになると、人々がその「人」ではなく「力」に群がってくるようになるからだ。そうすると、その人は否応なく、個人として存在するよりも、「力」の象徴として存在させられるようになる。虚構が大きくなればなるほど、つまり「人」と「力」のズレが大きくなればなるほど、「力」の責任は個人で担いきれないものとなる。「力」を持たされた者が、そのズレに気づき、それを修正していくことができるのかどうか、私は懐疑的である。

「力」に喜びが伴うことがある。それは、たとえば、私の知らないところで誰かが私の表現を受け取り、それを育ててくれたことを知った時。自分の思いを誰かが受けとめてくれて、まったく思いもよらない形で展開してくれるとすれば、自分の思いが自

分から離れて新しい生命を持ったことになる。一人でできることを越えて、思いが拡がりを持つのは心躍ることだ。

「力」にはたくさんの次元が交錯している。客観的に言って、社会的「力」を持つ者がその「力」を認識しない時、意図せぬ抑圧が起こる。たとえば若い頃には批判精神旺盛で権力に反発し続けてきた者が徐々に評価され、社会的「力」を持たされているのに、それに気づかず、相も変わらず自分は一匹狼だ、マイノリティだとしか認識できない時。筒井康隆の一件では、彼が自分を「ブラック・ユーモアの作家」と認識しながら、その作品が教科書に載るというギャップなどは、こういう例だろう（彼が差別表現をしたか否かということよりも、その後の姿勢を指す）。

ちょうど時は、筒井康隆の断筆宣言が話題になっていた頃だった。この時の学びは、私の心に深く刻まれている。いかにも同様のことが、将来、我が身にも起こりそうに思ったからだ。どんなに自分自身がパワーを拒否していても、外側からパワーを附与されることを免れない。この時点でしぶしぶ受け入れざるを得なかったことは、たとえば学歴や誰かの弟子など勝手にレッテルを貼られて賦与されるパワー、編集者であることのパワー（執筆料も払えないような自費出版の雑誌であっても、「雑誌を持っているということ自体が権力」なのだそう。そんなものか？）、そして「声大きい」というパワー（これは、自分への確信や説得力、自己主張の強さのようなもの）だったように記憶している。

とは言え、実際のところは、この時期、

社会的にも経済的にも強者と言うよりは弱者の立場であったから、権力者から搾取されそうになった体験が、そう多くはないが何度かある。「ああ、世の中の偉そうな人は、こんなふうに現場の人を利用するんだな」とその手口を知ったし、だからこそ、それだけは絶対にしたくないと今も心に誓っている。人を搾取するようなことは決してしたくないし、人から搾取されるようなことも決してしたくないと思う私は、そういう相手には情け容赦なく嘔みついていたから、みな尻尾を巻いて逃げて行ったものである。そんな力が自分にはあった。

どんなに権力と無縁でいたいと思っても、自分の意志だけでコントロールできるものではない。私たちが他者とともに生きていくしかない以上、外側から賦与されるものから逃れようがないのだ。だとすれば、それに無自覚でいるより、自覚的に注意深く扱った方がいいに決まっている。こうして、パワーを持つことを少しずつ受け入れるようになった。すでに書いてきたように、研究所の基盤固めの時期、私は、じたばたしながらも、リーダーとしての責任を引き受け始めていた。とにかく気をつけてきたことは、研究所のメンバーたちがリーダーに盲目的に従うようなあり方を回避すること、自分たちの目的や活動にそれぞれが個人的な思いでもって責任を感じられるようにすること、自分を含め、スタッフ同士の関係性を権力関係ではなく、親密な関係として維持することだった。

1995年の阪神淡路大震災に関するシンポジウムで、中井久夫さんが、「私の持てるささやかな権力を使って」、世の中にとって良いだろうことをしたと話すのを聞いた。

具体的にそれが何だったのか内容は覚えていないのだが、そんな権力の使い方はさらに新鮮だった。権力者が持てるパワーを意図的、積極的に使うということである。「これは大人な発想だ」と思った。若者は批判し壊すのが仕事であるが、いくつになっても批判して壊すばかりの姿は醜い。不十分なものであれ、最善と思われるものを作っていくことが大人の仕事である。そして、それは後から来る人たちによって壊され、改善されていけばいいのだ。そう思って、仕事を続けてきた。仕事は人を大人にしてくれる。

当時と比べ、私も年を取り、経験を重ね、学び、たくさんものを身につけてきた。たとえば、「女性ライフサイクル研究所を立ち上げ、二十年維持してきました」と言うだけで、その内容如何に関わらず、発言がぜん説得力が増す。本当のところ、これはインチキだと思うが、何かを長く続けてきたこと、もっと言えば、年を取って人生経験を増すということ自体が、良くも悪くもパワーを補強する。だからこそ、人は年輩者に敬意を表してきたのだろう。

知らず知らずに増すパワーには要注意である。たとえば、私の場合、人を判断するときに、時々見間違いが起こるようになった。若かった頃、権力者に媚びへつらう人が大嫌いだったから、パワーを持つ人に物事をはっきり言う私は、権力主義者からは嫌われていた。必然的に、そんな私を受け入れ、おもしろがってくれる人は、権力主義とは遠い人たちだった。だからある意味で私は安全だった。勝手に「私のことが好きな人は良い人だ」と思っていたのだが、

年を取った今となつては、そうはいかない。私のことが好きなわけではなく、私が持っているものが好きで近づいてくる人たちがいるからだ。これを見分けるのは難しい。それに、事態はもっと複雑で、どうやら、見る眼もないが悪意もないという人々が大半なのだ。

こうなってくると、あとはきわめて個人的な価値観の問題になってくるので、私の思考についてこれない人たちもいるだろうが、私は人として信頼できて、心を開いてつきあえる人とだけ一緒に仕事をするつもりだった。と言うか、連載の初めに書いたように、一人で仕事をするつもりだったところから、絆を結びつつ共に働くという形を身につけてきたところだった。私にとって仕事は神聖なものであり（仕事は個を越え出るスピリチュアルな行為であると思っている）、仕事は世俗のなかでやっていくものであるけれども、世俗にまみれさせてはいけないものなのだ。しかし、大きな組織で働くようになると、必ずしもそうはいかない。絆を結ばずとも、人として好きでなくとも、一緒に働かなければならないこともある。親密な関係になれない人と近い距離で一緒に働くということに私はまだ慣れない。

それに、大学の先生をやっているということは、それだけで十分に権力的である。権力を支える基盤として、しばしば、①報酬を与える力、②強制力（脅しや罰）、③法的力（警察など）、④参照にされる力（同一化、魅力、尊敬など）、⑤専門家の力（特別の能力や技術）、⑥情報の力（理性的な議論やデータなど情報に基づく力）という6つの要因が挙げられるが、大学に勤めて

いると、多くの要因を満たしてしまう。ハラスメントの温床になるゆえんだ。権力と追従に関する有名なミルグラムの実験者は、これらすべての要因を持っていた。イエール大学の研究者というだけで人々から信頼され尊敬されていたので、被験者となった一般の人々は、たとえ多少人に危害を与えようと、これは意味のある重要な実験で、従っておけば間違いはないはずだと考えたのである。ちなみに、大学で実験するのをやめ、民間の会社の実験ということにで、ショッピングセンターの一角でこの実験をしたところ、最後まで追従し続けた人は二割減少している。恐ろしい話だ。

正直に言えば、私がパワーや権力に対して極度に警戒してきた理由は、昔々から、下手すると自分はミニカルトの教祖くらいになるかもしれないと密かに恐れてきたからである。だから、自分で扱える以上のパワーは持たない、たとえ自分のパワーであっても、自分で扱える以上のパワーは使わないと決めてきた。パワーに翻弄されて、方向性を見失うのでは本末転倒である。年とともに人として成長することができれば、器が大きくなって扱えるパワーは大きくなるのかもしれない。詳しく知っているわけではないが、『ハリー・ポッター』は、自分のパワーを持て余す者が自分のパワーを扱えるようになっていく成長の物語であるような気がしている。パワー、あるいは権力が自由を妨げるのではなく、真の自由をもたらすためには、それを扱えるだけの器が必要で、人間を鍛えるしかない。大人であること、自由であることは疲れることだ。